

NMO OfficeLetter

京都商工会議所会頭が堀場 厚氏に交代

京都商工会議所は昨年12月に開いた臨時議員総会で会頭の交代人事を承認した。病気療養中の塚本会頭に変わり、堀場副会頭が会頭に就任する。堀場新会頭は、任期途中での交代であり、10月までの残りの任期を担うことになる。塚本会頭はかねてから病気療養中で、会頭の職責を全うできないとの判断から、今回の交代となった。4月から大阪関西万博も始まり、多くの海外からの賓客の来日が予想され、関西地元京都の会議所の会頭の空席は良くないとの判断があったのだろうと推測されている。



＜解説＞京都の商工会議所の会頭は、地元オーナー企業のトップが務めるという慣習が従来から続いていた。特に、京都という独特の文化が根付いている地域では、会議所の会頭には製造業系の企業のオーナー家から出してもらうという慣習があった。以前には、京都ではオーナー家から代表者が会頭を務めることが多かった。ワコール、オムロン、村田製作所など、名だたるナショナルブランドの企業から会議所の会頭が就任していた。特に、京都という独特の企業文化が育まれた土地柄、サービス業系の企業より製造業系の企業から、という空気は一貫していた。金融や保険、証券などの金融機関やその他のサービス業



から会頭に就任というケースは、ほとんどなかった。隣県の滋賀県では、会議所の会頭は歴代地元地銀のトップが就任するという慣習があった。京都ではそれはなかった。副会頭には多く金融機関やサービス業のトップが就任していたが、ほとんどは製造業系のオーナー企業のトップが会頭に就任していた。折しも、経団連の会長に日本生命の会長が就任することが報じられ、驚きの声があがった。経団連の会長は、京都の会議所の会頭同様に、製造業系のトップが就任するという流れが主流だった。今回、初めて金融系から経団連の会長が出たことは、時代の流れを象

次期経団連会長の筒井氏



徴すべき事象と受け止められている。日本経済の構造変化を表す出来事だ。電機、製鉄などの製造業の名だたる企業から輩出されていた財界のトップが、サービス業、金融業界から出るという事実は、日本経済の実態を顕著に表していると言っても過言ではない。日産自動車の凋落と相まって、日本のお家芸の製造業の不振は今後も続くのか。

